虐待を受けて育った母親の苦悩

母親は小さい時から、実の父親から酷い虐待を受け、他の兄弟とも差別されて育った。実の母親は夫を恐れ、陰で娘を支えた。母親はそんな中で、雑草のごとく生き抜いた。

結婚して長男が生まれ母になったが、翌年年子の次男が生まれた。非協力的な夫との関係も悪くなり、子育てが大変になった。鬱になってしまった時期もあったと言う。

その長男が中学３年で不登校になり、私のところに相談に来て、対応を始めることになった。ところが、彼のカウンセリングの初日、彼は来なかった。電話をして聞くと、彼はカウンセリングの予約日を勝手に決めたことに怒り、「僕のことを大切にしてない！だから、行かない！」と言って、自分の部屋に入ったきり出てこない、と。母親はそんな彼の態度に腹を立て、家の壁に八つ当たりした。折角対応を申し込んだのに、彼が私のところに通えなかったら、夫にも言わずに申し込んだことを、彼が夫に言ってしまったら、どうなってしまうのか、不安で居たたまれなくなったと言う。

母親がこうなったのは、勿論初めてではなかった。彼への対応で感情的になり、時に感情をコントロールできずキレて、手を挙げたり、物に当たってしまうことが多々あった。特に彼が不登校になってからは多い。母親は、自分の心の中は、抑圧されてしまった怒りでいっぱいだと言う。夫との関係も、益々悪くなっていった。

そんな母親の元で育った彼は、幼児時期、自分の頭を壁に当てることがよくあった。自分が悪いと責めているようだったと言う。

幸い彼は私とじっくり話すことができ、納得して対応を受け始めた。母親のカウンセリングも始まった。彼の祖母が交通事故にあったことがあった。偶然相手の車に同乗していた友達の嘘の証言を知り、不信感を覚えた。その後も度々父親の正当性を吹聴する友達を見るのが嫌になり、学校に行かなくなった。でも、彼は友達と 3 人で家庭教師に教えてもらって、勉強は続けた。数か月後、その友達が志望する高校は行きたくないと、相談を受けた。９月の学力調査で、得意げに言う彼の点数を友達から聞いた。自分と同じ位の点数だったらしい。10 月の中旬、地域魅力化プロジェクト国内留学支援を行っていた私は、母親の同意の元、彼を他県の県立高校のオープンハイスクールに、1 泊 2 日で連れて行った。彼はその高校を大変気に入り、勉強にも身が入り始めた。翌年 2 月、その高校の推薦入試を受け、合格した。両親そろってお礼に来た。初めて父親を見た。母親も落ち着いた笑顔だった。

親元離れた寮生活が始まった。その 3 年後、彼の高校の先生から、彼の国立大学進学が決まったとの連絡を受けた。